

赤い熟果生産に適した伏見とうがらし新品種の育成～現地適応性の評価～

農林水産技術センター 生物資源研究センター 応用研究部 鴨志田 徹也

1 はじめに

京都府産の伏見とうがらしの熟果は、ホテル等の業務需要を中心に取引されているが、既存の品種による栽培では、樹勢の低下やしおれ果の発生により熟果の出荷量は少ない。そこで、当センターでは、これらの問題点を改善したF₁新品種の育成に取り組んでいる。本報告では、昨年度選抜した有望系統について、現地栽培ほ場等で熟果収量等を調査し、適応性を評価したので、その概要を報告する。

2 新品種候補の現地適応性評価

昨年度選抜した有望系統「12-18×3-3」(以下「3-3」)と、果実が長い系統「12-18×3-45」(以下「3-45」)(図1)を、当センター(精華町、ロックウール栽培)及び農林センター(亀岡市、土耕栽培)で半促成の作型で栽培し、熟果の収量性及び果実品質を調査した。

収量性について、当センターでは、熟果可販果収量は「3-3」、「3-45」で伏見と比べて多くなった。また、実需者が求める細長い果実(伏見タイプ秀)の割合は、「3-45」で秀優良合計の14%、「3-3」で8%程度であった。一方、農林センターでは、夏期に尻腐れ果が多発したことにより、熟果可販果収量は「3-3」、「3-45」で伏見と比べて少なくなった。

果実品質について、当センターでは、果実の長さは、夏期、晩秋期ともに「3-3」は伏見並み、「3-45」は伏見以上であった。果実の幅は、晩秋期に3-3は伏見と比べて細くなった。ロックウール栽培では土耕栽培(昨年度の調査結果)と比べて果実の幅が細くなる傾向が見られた。

3 今後の展開

「3-3」、「3-45」ともに、半促成の作型で熟果をメインに収穫する栽培を行うのは、夏期に尻腐れ果が多発することがある、伏見タイプ秀の収量が少ない、といった問題点があるため、難しいと考えられた。

なお、現地栽培ほ場(宇治市)において、秋定植の作型で栽培を行っている。2月上旬時点では、未熟果中心の収穫であるが、「3-3」、「3-45」ともに尻腐れ果はほとんど発生していない。今後、熟果についても調査を行い、秋定植栽培の適応性を検討する予定である。



図1 有望系統の果実 (Bar=10cm)